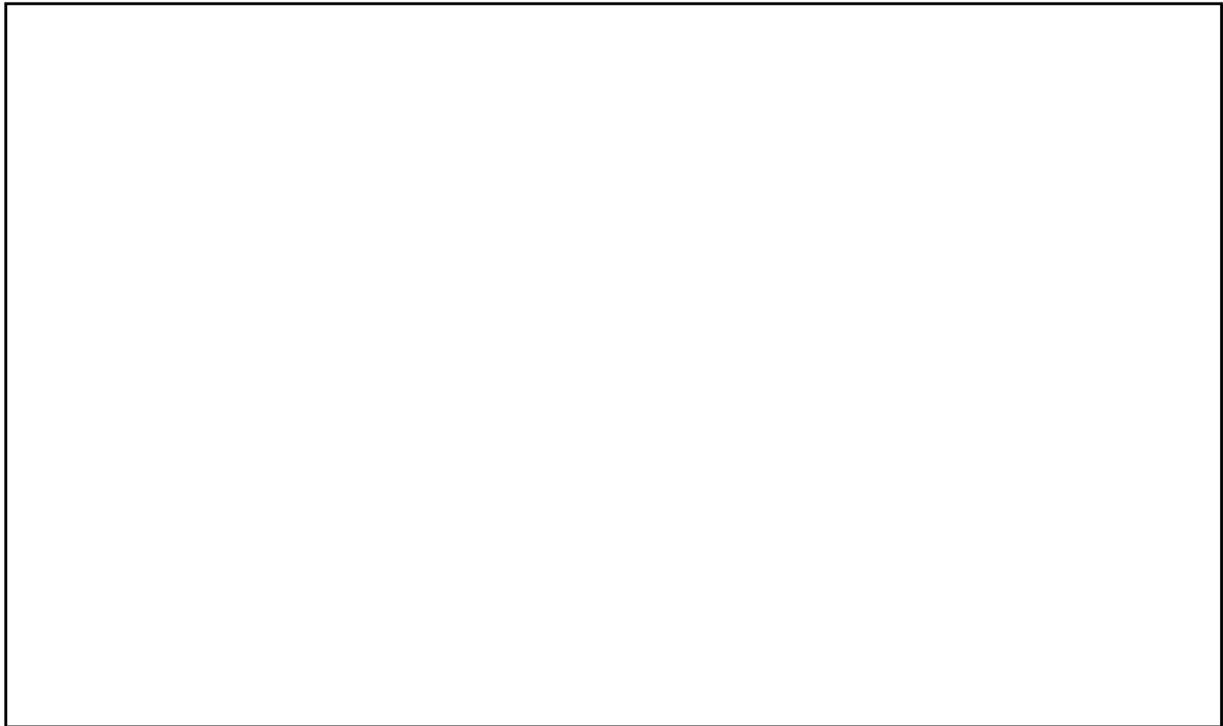


里地通信 3月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：<http://member.nifty.ne.jp/satochi/>

連載：幹事紹介 イオンのふるさと森づくり



廣田耕一（ひろた こういち） 株式会社ジャスコ環境社会貢献推進室長

昭和18年7月21日、元満州ハルピン生まれ（同じ境遇の方おられたらご連絡下さい）

昭和41年3月三重県四日市市の「オカダヤ」へ入社。入社当時は半年ごとに転勤。昭和45年に姫路市フタギ、大阪シロと3社合併、新生「ジャスコ」誕生（本年創立30周年）

結婚して25年間で転居14回（昨年3月本社・現職へ）、2人の子どもは各5回転校で「母校がない」という言葉に胸が痛む。

タイトルは、私の趣味といえます。

ジャスコ岡田卓也会長の哲学で、10年位前より「木を植えよ」を度々訴えられていた。8年前に岡田会長が横浜国立大の宮脇昭名誉教授と対談、即感動、行動をとられ現在に至っている。この植樹祭を当社では「イオン（ラテン語で永遠という意）のふるさとの森づくり」と名づけた。今迄に、海外6店含み212店舗で約

280万本の植樹がされた。私は国内第1号店の親久居店（三重県久居市）の植樹祭より今まで約30店舗で宮脇先生とご一緒（弟子？）に携わってきた。先生は「ムギワラ帽」、私は登山スタイルがトレードマークとなっている（写真ご参照）。最近では、市街地に植えられた木々を見、藁を触りながら「これはタブノキ」「これはクロガネモチ」etc 木の名前を口づさんでいる。又、ジャスコの店舗まわりの途中、自分の植えた木々の成長を確かめるのが癖になっている。本年も15店舗位、植樹に立合う。あと5年で退職だが、未永く木々の成長を見る楽しみが出来た。いつしか「鎮守の森」を見るのが夢でもある。

この他にもタイへ2回、中国へ1回行き、地元の方々と植樹してきた。本年は6月にタイ、7月には中国植樹に行く予定だ。前回植えた木を見るのは、同窓会に出席するよりも心が躍る。月に1～2回の植樹祭参加が私の趣味そのものになってきつつあります。

当社では、毎年4月29日のみどりの日には植樹された方々、当社の新入生中心に「育樹祭」を実施し、草抜きや記念写真撮影会をしています。ぜひ、関心のある方はご参加ください。飛び込み大歓迎です。

当社では、積極的に「子供エコクラブ活動」を支援しており、本年は3,000名の会員を募集中。是非、「里地ネットワーク」様とタイアップして、次代をにいう子どもたちに里地の大切さを体験してほしいと願っている。

本年は、私自身も本格的に「里地」での体験学習をしたいと願っています。

略 歴

昭和18年7月21日生

昭和41年3月ジャスコ入社

四日市店店長、大阪店（愛知県）と成田店（千葉県）の開設委員長、本社催事部長、社長室広報部長等、歴任。全ジャスコ労働組合初代、2代目中央執行副委員長、歴任。近畿カンパニー「環境委員会」事務局長を4年間担当。阪神大震災ボランティア活動、ルワンダ難民救済バザー等、率先実行。

現在、グリーン購入ネットワーク幹事、経団連社会貢献推進委員会 社会貢献懇談会メンバー。

国内では「分収造林」へも参加。

推薦図書

『**BIO-City**』 no.15 発行:(株)ピオシティ

年間4回発行されている「生命都市」時代の環境と地域づくりを考える総合誌。今回のテーマは「21世紀の環境プラン」であり、今年度里地セミナーをいたしました吉本哲朗氏の熊本県水俣市の地元学の展開、事務局竹田より愛知県美浜町での地元学実践報告をしています。

また、ジャーナリストであり里地ネットワークのアドバイザーになっていただいている高杉晋吾氏の長野県阿智村で実践されている「社会環境アセスメント委員会」の取り組みと天竜川流域での循環型社会づくりのさまざまな活動についてレポートされています。その他、さまざまな地域のエコロジカルデザインに関するレポートが紹介されています。

里地ネットワーク総会報告

2月13日午前、里地ネットワークの会員総会および1周年報告会を行いました。主な報告内容は以下のとおりです。また、里地憲章についての討議及び、次年度活動内容に関する検討を行いました。

里地憲章に関しては、「環境と経済の両立」という目的に「文化（生活文化）」を加えるほうが実状に基づいている（標茶シンポジウムでも提案）との提案があり、これを盛り込んで再構成することとなりました。また、「元気な地域は、必ず女性が元気、女性は元々元気だから前面に出せている地域が活性化している」ということが確認されました。この内容も盛り込みたいと思います。

次年度計画に関しては、申請中の補助金が確定した時点で（4月中旬）場所、内容などの細目の検討を行うこととなりました。

ただし、次年度も本年度と同じように、以下の事業を予定しています。

「連続セミナー」：5月より10回程度を予定しています。テーマ、講師についてご意見下さい。

「地域調査」：3カ所程度を予定しています。候補地案があればご意見下さい。

地域ミニセミナー＆交流会を検討しています。ご意見下さい。

都市近郊の里山保全に関する知恵を集め合う定例検討会議の検討をしています。NGO、行政との連携での検討会はいかがでしょうか。ご意見下さい。

里地通信に関しましては、幹事紹介の後に、会員レポート、または、会員インタビューを行ないたいと思います。ご協力お願いいたします。

里地ホームページに関しましては、会員情報を盛り込みたいと考えています。ご協力お願いいたします。

会員の相互交流の仕組みを考えていきたいと思いますが、会員名の公開に関して問題がある場合はお

知らせ下さい。（名称、地区までは問題ないと思いますがいかがでしょうか）

会員主催のイベント情報のメディア広報に協力していきたくと思いますが、情報をお待ちしていません。

1年間の活動について

環境保全型里地づくりを行うための基層には、住民自治、住民参加の度合いが、地域の環境と経済に大きく関わっています。言い換えれば、風土と生活文化とは、住民の意識のモチようによって大きく変化する問題であるようにも思えます。つまり、経済効率のみの生活様式の人、過去の生活文化や風土を軽視しているし、地域の環境や結いというような地域に根ざした暮らしや、地域を良くして行こうという取り組みを軽視するきらいがあります。本年度は、環境保全型里地の理想像を求めて、また、その機能やしゅきを求めて、以下のような調査活動を中核に据えて行いました。

集落単位での住民参加による地域計画づくり

（愛知県美浜町）

町村での住民参加の地域計画と住民自治

（標茶町、小国町、智頭町、諸塚村）

環境先進地での、環境政策、総合計画、生活文化と産品開発（熊本県水俣市）

都市生活から田園生活へのシフトシナリオ

（国際航業株式会社、茨城県八郷町）

宮沢賢治の町づくり「農民芸術概論」「石っ子賢ちゃん」の暮らしと商品開発研究（岩手県東山町）

など、極力関わる地域において、研究ではない実践的な取り組み通した、外の風としての個別支援を行いながら調査研究を行いました。

また、各地での実践を行うための基礎概念として、さまざまな理念や技法の研究を合わせて行うことにより、科学的な検証や社会システムとしての把握を行えるように務めてきました。各種実践調査やセミナーを通じて、1年間の活動で報告させていただきたいことは、

- ・環境保全型里地の実践範囲は、モンスーンアジアの稲作文化が行われる地域を対象とすることが、風土の共通性から可能ではないかという考え方
- ・日本の民族文化のなかには、西欧文明に学んだ近代化、高度経済成長期に、軽視されていたが非常に重要な生活文化が蓄積されており、その文化の伝承が早急に求められていること
- ・環境保全型技術は、さまざまな技術がこれからも開発されていくが、特に、河川土木や治山においては、伝統技術の中にさまざまな自然と共生する技術が含まれておりこの技術の仕組の解明が必要であり、自然と共生する技術は、伝承技術を重視すべきこと
- ・地域の活性化は、まず、地域住民が地域の歴史、文化、自然資源、生活文化を知ることから始めることで、住民自身による地域のあり方を協議し、住民による地域づくり、地域計画を作成していくことで、地域固有の風土、自然生態系、地場産業（風土産業）が活性化し、人と人、人と自然の共生する社会が営めるのではないか
- ・21世紀の持続型社会は、地産地消を前提とし、生産型自給型の地域内循環型社会が求められている。この実現モデルを、里地で創造し、検証していくことが必要

という認識にいたったことです。

地域調査の骨子は以下のとおりです。

集落単位の住民による地域資源の発見と住民参加へのしくみづくり（愛知県美浜町）

日本の国土の約50%を占める里地。この里地では、全国いたるところ、自然の豊かさや都心からの距離とは関わりなく、仕事は都心、レジャーは観光地、カルチャーセンターとテレビゲームに象徴されるような都市型の暮らしが営まわれています。

地域のことを知らない生活、地域と一員としての自

覚が希薄な暮らし方。自然を破壊しつづけていることに無関心な暮らし方、高度成長からバブル期を経て変わりつつあるものの今だ現世代の経済と暮らしを前提においた生活様式。

このような生活様式から、持続型の、循環型の社会、自然と共生した暮らし方を模索していくには、私たち自身が生活している地域のことを、まず知ることから始めなければ、いかなる議論も空論になってしまいます。

自分たちの住む地域の風土や自然、地域にあるさまざまな資源を発見する「地元学」の手法を用いて、集落の人々、町職員、学生、学者とともに、水源から河口までの「水のゆくえ」と「水の使われ方」を調べ、地域内の食べ物、植物、動物を観察することによって、埋もれていた地域の資源、生活文化、伝統技術の発掘を行なうことで、生活者の意識の転換の様子を私たち自身が検証しました。この発見を、シンポジウムを通じて広げることで、生活者の意識の転換と住民参加の仕組づくりが可能となり、住民による地域計画策定の芽が確実に芽生えまじめています。今年度はこの動きがさらに全国に飛び火することを願い、システムづくりを行っています。

町村単位の地方自治、住民自治、地区計画の先進事例から学ぶ（北海道標茶町）

北海道標茶町において、平成11年2月5日（金）～7日（日）「地域はどうすれば活性化するのか」をテーマに、環境保全型里地づくりシンポジウム in 北海道を開催しました。「住民主体の、住民主導の、住民参加型のそれぞれの地域づくり」「現状を正確に把握し、夢を描き、夢に向かって10年先、20年先の具体的な地域の将来像を協議し確認し計画をたて行動する」地域づくり。地方自治、地域経営の芽が日の目を見る時代が来ようとしています。

- ・コミュニティプランと小国ニューシナリオを実践する「熊本県小国町」
- ・自治公民館制度と住民自治による地域経営を行う「宮崎県諸塚村」
- ・1集落再編の際に地区計画を推進する「北海道標茶町」
- ・「日本1/0村おこし運動」集落単位の計画づくりと自治を目指す「鳥取県智頭町」

などからの報告を受けて、これからの地域づくりを語り合いました。この語り合いから、それぞれ固有の自治意識と地域リーダー、そして、外部支援者たちの協力による地域づくりの試み、社会システムの観点から、自治の形成過程、障害解決に向けた、さまざまな試みへの挑戦の足跡を学びあいました。住民主導、集落計画、地区計画、マスタープランへと住民自治が実を結び、環境と共生した自治体が生まれていきます。

環境先進地から生活意識と21世紀の暮らし方、環境政策を学ぶ(熊本県水俣市)

平成10年10月2日～4日「エコ水俣フィールドツアー」環境再生水俣・生活文化体験を実施し、水俣病を乗り越えた環境先進地としての水俣から、21世紀、私たちがこれからどこへ向かうのか、そして、どのような暮らしが、環境・健康・循環・持続・共生型の社会を創造するために必要なかを学びました。水俣の経験を、全国に伝えることで、安全、安心、環境を根幹においた暮らしと自治、地域の持続シナリオを描けるのではないかと考えています。

以下は、ツアー及びシンポジウムの趣旨です。

三方を山に囲まれ 一方を海に開いた水俣は ひとつの小宇宙。人々は海の民 野の民 山の民 そして マチの民に分かれて 水の恵みに暮らしています。人だけでなく多くの生命を育む水の恵み、海と山を結ぶ川 自然と暮らしをつなぐ水から水俣は再生します。モノや地域、そして生活づくりの背景にある地域固有の風土と生活文化の厚み、源流域から不知火の海に注ぐまで水俣を流れる水俣川、リアスの入り江と森の恵みは不知火でも有数の藻場を育て、人々は野山や川、海の幸に暮らしていました。そこに発生した世界に類例のない産業公害である水俣病は海や魚を汚染し、人の健康だけでなく生命を奪いました。発生から40有余年、ようやく公害防止事業の実施、被害者の救済が進み、今、水俣は再生へと旅立っています。水俣病の教訓に学び、環境と地域の暮らしのありようを考え、行動している水俣は、環境と共に生きる暮らしづくりの先進地に生まれ変わりつつあります。様々な水俣に学んだ人々の存在がそこにあります。環境再生水俣・生活文化体験ツアーは、私たち自身が、水俣の経験と風土に根ざした生活づくり、モノづくり、地域づ

くりを、ツアーを通じて体験することにより、暮らしをみつめ直すきっかけとなることを願っています。

水俣とは、

- ・ チッソ、水俣病患者、水俣病センター想思社、水俣住民、行政による40年の歩みと和解
- ・ 再生する水俣、水俣市の先進的な環境政策、資源の活用、ISO14001...
- ・ 暮らしを掘り下げる「水俣地域資源マップ」「水の経路図」「水俣地域人材マップ」
- ・ 環境ツーリズム、エコツーリズム、グリーンツーリズム、小グループ修学旅行への展開
- ・ 新しい水俣へ訪れてくれるファンづくりであり、将来の水俣定住予備軍をつくる足がかり。

水俣の人々の暮らしを体験することで、私たちの生き方を見詰め直したいと思います。再生する水俣から学び、環境共生水俣を広く伝えましょう。

新しい暮らし方を模索して

「新田園生活のすすめ」(茨城県八郷町)

あふれ出る情報と大量生産、大量消費に覆われた社会には、社会の第一線で夢中で働きつづけてきた人々が暮らしています。企業社会、経済生活を核とした社会、縦割社会、画一的な教育の中にいる青少年、このような社会の中で人々が、自らの生き方、都市生活のあり方を、ふと振り替える時、自分にとって、そして、家族にとって、都市生活というものは、最良の選択であるといえのでしょうか。

人々が自然と調和しながら暮らせる場所、そして心豊かに生活できる場所こそが、心のふるさとであり、暮らし方ではないかと考えることもできます。21世紀にむけた暮らしとは何か、心の豊かさを求めて自然に触れ、自然の中で、さまざまな生き物たちや、土と太陽と豊かな水、そして、みずから育てた野菜や花たちとの語り合いのある暮らしについて語り合い、都市生活から新田園生活へと、どのようにシフトするか、その実践者からの報告を受け、茨城県八郷町への生活の転換、生活のシフトプログラムを紹介します。極端に集中した日本の都市生活から、欧州におけるような分散型社会、田園生活への緩やかなシフトプログラムが、拡大することを目指しています。

宮沢賢治の生き方に学ぶまちづくりと暮らし、風土産品開発の実践 (岩手県東山町)

宮沢賢治ゆかりの町で、賢治が自然との共生を大切に考えていたことから、平成8年より、環境と共生した町づくり「グスコブドリの町づくり」が行われています。賢治の働いていた砕石工場をモデルにした「太陽と風の家」は、東山町の歴史文化を研究する地元の学生や子どもたちの環境教育センターとなり、地元の資源を活用した地域づくりを行っています。自然エネルギー教育のための風力発電設備、石、木、和紙、農作物などの地元資源を活用した産品開発と地域づくりが行われようとしています。この東山で、賢治の考え方を実践する暮らしと風土産業の構築（風土産品の開発）を実践します。

里地連続セミナーによる理念の共有

持続型、循環型、環境共生型社会とは何か。この根本的な理念を学ぶために、さまざまな理念、技法を学習し、これからの持続型社会、私たちの暮らしのあり方について考えてきました。1998年学習した主な理念や技法は以下の通りです。

「バイオシージョナリズム」(ピーターバーグ)

循環型社会を考える上での地域社会の大きさ

「エコミュージアム」

(日本エコミュージアム研究会)

歴史的遺産や文化財の保全方法についての考え方

「地元学」(吉本哲郎)

住民による地域資源の発見技法と住民参加のまちづくりの実践方法

「グラウンドワーク」(千賀裕太郎)

行政、企業、住民によるパートナーシップの理念

「地域はどうすれば活性化するか」(長谷山俊郎)

生き活きとした人々の研究報告

「外部参入者と地域活性化」(河原利和)

内と外の交流による地域づくり研究

「民族文化を伝承する」(姫田忠義)

日本の民族文化とは何かを記録映画で学ぶ

「モンスーンアジアと日本の風水土」(今井俊博)

日本の風水土の起源を学ぶ

「環境土木」(福留脩文)

これからの土木工事のあり方と自然治癒力について学ぶ

「これからの持続型社会は」(内藤正明)

21世紀の持続シナリオの学ぶ

里地づくりシンポジウム報告

地域はどうすれば活性化するか

場所：北海道標茶町

日時：2月6日(日)

今回のシンポジウム会場である北海道標茶町は、東西約59km、南北約60km、面積は約1,107平方 km の広々スケール、日本では第四位の大きさを誇る町で釧路国立公園と阿寒国立公園を有しています。町内を東西に分ける釧路川の豊かな流れは、南に釧路湿原、北に酪農地帯とその大地を分けています。

人口約10,000人、総世帯数3,500戸のうち、農家は約600戸26,000ha の農地に約40,000頭の牛を飼っています。

この地域をより深く知るために、前日(5日)には標茶町の職員による「標茶のライド上映会」、翌日(7日)には地域でオオカミを通して自然環境の現状を伝えている方による「標茶町体験ツアー」が開催されました。また、シンポジウムに参加された方々と講師の方々との交流を深めるため、シンポジウム前日(5日)と当日(6日)に交流会を開催しました。

シンポジウム報告の概要は以下の通りです。

シンポジウム開催主旨

それぞれの哲学と技法で、住民主体の、住民主導の、住民参加型のそれぞれの地域づくりを行っている地域が日本の中にはあります。国からの押し付けでない、県からの押し付けでない、市町村からの押し付けでない、集落や地区で、自分たちが住む地域を良くしていこう。そのためには、住民自身のみずからの地域を知り、自らの夢を語り合い、これから自分たちはどのような生活をしていきたいのか、どのような地域の中で暮らしていきたいのか、そして、自分たちの地域をどのようにしていきたいのか。現状を正確に把握し、夢を描き、夢に向かって地区の10年先20年先の具体的な地域像を協議し確認し、その具体的な将来像を実現す

るための1年間の、2年目の、3年目の、そして、5、10年目の行動計画を作成し、その計画に沿った共同作



業を、住民、地方自治体、企業、大学、研究機関、県、国がサポートしながら地域経営を行う。このような地方自治の芽が、やっと日の目を見る時代が来ようとしています。

里地ネットワークでは、本年1年間、さまざまな地域の人々に会い、地域づくり、地域活性化の試みに接してきました。この中で、特にネットワークとして、相互に学び合い交流を行うべきではないかと考えた核になる地域があります。それぞれ固有の自治意識と地域リーダー、そして、外部支援者たちによる地域づくりの試みは、社会システムの観点から、また、自治の形成過程、課題、障害、解決に向けたさまざまな試みへの挑戦の足跡そのものであると思います。

各地からの報告

宮崎県諸塚村より

「戦後公民館制度を独自の自治公民館制度に改定し地域計画を進めている」

報告者：中田光顕氏（諸塚村自治公民館連絡協議会会長）・甲斐幸雄（諸塚村教育委員会）

諸塚村は山に囲まれた厳しい生活環境にあり、主産業である産業林と景観林から経済活路を見出そうとしていますが、林野の厳しい経済になっている。

昭和21年の文部省通達による施設を通した公民館活動は末端への活動浸透につながらなかったため、自治公民館活動の沿革を行い、15の自治公民館の活動拠点を昭和23年に設立した。

現在、公民館活動は地域の人を結ぶ唯一の組織であり、住民のための住民の組織として存在している。ここでは、人づくり、地域づくり、ものづくりを行う。

多くの人が見学に来る中で、ものづくりが一番理解されにくいのが、これは、生産活動、生産教育の充実、生産のための学習、事業、等を行うことであり、住民に応じた活動をすることが重要。

営農家の自立を求めた複合農業を行っている。これらの実績は公民館活動を通して行われたものづくり活動の成果。

集落独自の活動のほとんどが公民館によって行われ、他にも公民館を通して行われているものが多い。館長は働き盛りの壮年で、最年長でも60代。行政施策にも公民館が関わり、常に緊密な連携を取りながら行っている。

自治公民館の組織単位は16の集落で、各100戸くらいです。

その中に部会が置かれ、これは各家庭を結んでいる実行組合で、各組合長がいて、全ての責任を負うのが公民館長。選挙で選ばれている。

役員会は各委員長12名ほどで構成、毎月行われている。各家庭から行政に関することまでの協議をしている。

自治館長の役目はすべて。行政と関わりながら人づくり、ものづくり、地域づくりを行っている。

これからの課題として、高齢化、子供会、地域を連帯して守る意識をどう作っていくか、集落の人の安全、ゴミの問題環境を守る問題、人の問題、集落の生産活動等、を考えていかなければいけません。

現在の構想は、山の自然を活かしそこに住む人が楽しめる風景を作り、桃源郷に仕上げる。死ぬまで楽しく現役で働けるような地域づくりを行っていく。

地域森林理想郷作りを、行政が関与せず事業を行っている。現在6つの地区が指定を受けている。今年5月の公民館大会で実績活動報告をする予定。

熊本県小国町より

「公民館制度をひかず独自の地域振興会を継続して今日のコミュニティープランによる地域づくりを行う」

報告者：宮崎暢俊（小国町長）・江藤訓重（（財）学びやの里）

・行政と町民の関係

町民プランニングシステム：行政はツール、プランニングシステムは町民が新しいことを考えてく仕組み。

町民一本釣りシステム：町から積極的に行政に関わってくれる人を指名する制度。

・住民による地域づくり

地域の悪条件ばかり目をむけてしまうと頭に地域の夢が描けない。町づくりの取り組みを行うことによって新しい人が来る、そして新しい産業が起こる。農村の地域性として保守的なところが挙げられるが、子供たちが担っていく、継続性や地域性を考えると、昔のまま何かを保存するのではなく、新しくそれを考えていくことが大切である。

小国は公民館制度を持たない。よって集会場はあるが、ここの建設費は地区で捻出している。その為には宿泊施設として資金集めをしているところもある。そんな地区はここの窓を開けて、夢をどんどん膨らませていける地区である。

・文化

地域づくりを考える時に重要なのは経済と環境。しかし、もう一つ重要なのは、文化である。文化芸術を前面に出している町づくりということで小国は有名になっているが、逆に、今まで他に文化を考えて町づくりをしてきた行政が少なかったのではないだろうか。

経済の基盤として支えているのは文化である。今までの政策は、文化を見ないで、経済に走ってきた。地方分権が進む中、特に農村において文化が重要になってくるのではないか。

例えば人口増加、という面から見れば、小国は評価されていない。しかし、数値的な右肩上がり思考でなく、町民自身の文化や暮らしの質を高めることが大切。しかし、この質の向上はなかなか目に見えず、地域づくりを行うにあたってはこの辺りにいらだちを感じる

ことが多いのではないかと。

町には風格がある。経済だけで地域づくりを考えるとその風格は失われていく。そしてその風格を形成している町民が軽視されてしまう。そうではなく、生きていて楽しいな、自分たちの暮らしの方が魅力的だ、子供たちも小国に残りたい、と思うことが大切。

・グリーンツーリズム

これからの町での取り組みは「新しい旅」。町外との交流による波及効果が町をどう捉えていくかということを考えていきたい。

「小国は一番」という一人よがりではいけない。町外の人との交流によって新しい町づくりが始まるのではないかと。

ツーリズムとはお金を落としてもらおうということだけでなく、交流によっていろんな影響を落としてもらおう、という方が大切。

鳥取県智頭町より

「13年前にたった2人で始まった地域活性化運動から始まる「日本1/0おこし運動」と「ひまわりシステムのまちづくり」を推進する

報告者：小林憲一（智頭町地域開発課長）・小屋本好幸（日本1/0おこし運動集落振興協議会）

岡山県と兵庫県に接した町であり、面積は標茶の5分の1、山ばかりで盆地的な地形。93%が山林、傾斜度は35度くらい。400年程前から植林を行い、杉の材で経済を支えてきたため、現在は非常に厳しい経済状況。人口は10,000人です。山の中の町ですので、源流域になっていて、水と空気が生かすべき素材になっている。

宿場町から発展した古い歴史を持ち、封建的な町。そういう中で旧村の意識も高いところで、統合が難しい。山の町での経済は、ほとんどが大きな地主の下で、それに関わってきたといううしくみになっている。

経済のしくみが変わってきて、心が変わっていないという状況があり、昭和50年代まで町長と議員が変わらない。しかし60年から、人が変わった。経済の衰退から、町に働きに出るようになり、政治の世界も不祥事が続き、それ以来毎期町長が代わっている。

Uターンである郵便局長が地域づくりについての新しい波を起し、これが動きをなした。住民意識をどう

変えていこうかと言うことを役場の職員、外部の人との勉強会を行いながら、30人くらいで智頭町活性化プロジェクト集団CCPTを結成した。学習を重ねながら意識改革をしていく中で、経済として成立たなくなっている杉が住民のポリシーとして抜けきれない状態であった。そこで、間伐材の利用等を行政の方に提案し、行政のバックアップのもと行った。さらに、産業組合を作って、ログハウス群の設計を始めた。現在、年間10~20棟くらい造っている。他にも木工の事業を興している。これらは住民の方の企画でしたので、行政はトイレや河川整備をして支援している。また、カナダからログビルダーを呼んだりして講習会を行った。全国から人が集まって、家を建て、整備した。現在はおじいちゃんおばあちゃんたちが宿泊施設として管理している。

このように事業は受け皿を作って住民に落とし込んでいくという活動をCCPTは行ったが、住民の方が目的を持たないと元気にならない、ということで、どう目的を持っていくか、を考え、日本ゼロ分の一運動が生まれた。

日本ゼロ分の一村おこし運動

無い物から探す、お互いが一歩どこかに踏み出す、無限大に向けて行動していく、ということ。そして、古い慣習を打破していく、新しいことを興していく、ということ。どこでもやっている話だと思いますが、小さく目標を決めて大きく育てていきましょう、といっている。何かムラの中で種を見つけて、みんなでそのための土を作って水をやり、みんなで育てようというもの。ここで一番求めているのは身の丈にあったことをやろうということ。公民館でのマンネリ化した活動を再編していこうと言うのも目的のひとつ。

今までの村の計画は慣例でしかなかった。よって、10年間の実行計画の作成に全員が関わって下さい、と。現在動き出したのは、まだ9つの集落ですが、30の集落が動き出したらすべての集落が変わると考えている。

これを認定したら行政は合計300万円の支援とアドバイザー、町の職員をつけている。村の方は最低一戸辺り5000円出すのが応募の条件。これには「交流と情報」「住民自治」「地域経営」という3つの柱がなければ認めない。

ひまわりシステム

日本1/0運動の前段になったのが、ひまわりシステムという郵便局と役場の若い人たちの発想で生まれたシステム。

郵便局員さんが配達の際に配達以外の違うことをしてもらおう、つまり、独居老人の御用聞きのようなことをするという、過疎高齢化に伴い作られたシステム。局員さんと役場の職員の交流によって作られた。

御用聞きといって実際に御用聞きをしているところはほとんどない。安心して住めるようにということでは安否確認となっているところが大きい。今は、寝たきりの人を見ていこうということが新たな課題となっている。このような問題は住民が、地域が支えていかなければいけない。

日々行っていることをしくみとしていくことが次のステップにつながる。できる人ができることをやること、自分のできることをささやかにやるのが地域おこしではないか。

開催地より 塘路地区

「塘路地域振興の実施計画表」

報告者：越善徹（塘路地域振興会）

戸数113戸人口270人程度。塘路地区は森と湖の塘路、と言われ、映画のロケ地にもなっている標茶町発祥の地。

最近の環境整備

- ・ホテルレストランのピルカトウロの建設、
- ・JR駅前の整備、時速20kmで走る列車のノロッコ号、
- ・エゾシカ公園の設置、
- ・環境庁のエコミュージアムセンター、
- ・標茶町地域の歴史のある資料館
- ・釧路川カヌーの基地のひとつ 等

平成9年に小学校の開校100周年記念碑を作ることになり、1A1P運動を行うことにしたが、補助事業の申請には、地域整備計画が必要である、ということで、計画書と表を作成しました。

開催地より 虹別地区

「虹別の地域振興」

報告者：原田良雄（虹別連合振興会）

面積2万ha、人口1,000人強、酪農生産の基地として全国有数の地。4つの集落ごとの目的別活動が行われている。

昭和60年代に入ってから、町で集落再編の動きが始め、63年頃から集落再編作業が成され、4つの振興会が作られた。さらに市街の町内会が合併し、連合会が作られた。

全員参加で地域づくりを行うということで、自分でやれることは自分で、地域のことは連合会、大きな仕事は、町、農協と共同で、と考えている。

「ユートピアは田園にある」ということで虹別の公園化計画を進めている。これは基本理念の「生産の場としての役割に加えて、自然環境を守り、休養の場としての地域をつくる」とともに地域の理念、地域人の理念があり、これに対するアクションプランを掲げている。この計画の作成に当たっては、地域内の住民の声を聴き、連合会(?)によってつくられた。

これにより、農村公園、虹別の公民館、芝生の造成、農村公園、1A1P運動、パークゴルフのできる公園、多目的運動広場等を住民自ら重機などを持ち込み、手作りの整備を行っている。

また、地域のマップ作りを行い、配置図を作って全戸に配布した。毎年暮れにカレンダーも作っている。

町木の保存、西別川の水質・環境保全、連合会でもいろんな機会を通じて啓蒙し、民間グループでも取り組んでいる。

若い人からお年寄りまでのいろんなサークルができていて、これを通じて我々のいろんなイベントの力になっている。

開催地より 栄地区

「夢現なる栄」

報告者：今村忍（栄地域振興会）

釧路川の西側を走る国道391号線に沿って広がる地域で戦後軍馬補充部跡地に緊急開拓により入植した。現在、酪農家が15戸、非酪農家が14戸で栄振興会を構成している。

酪農を基幹としている栄地区は酪畜製品の輸入自由化が大きな影響を及ぼすと考えられる。

入植50周年を迎えた平成7年、「酪農文化村」として地域活性化を図っている。

栄地区の地域活動はコミュニティーハウスの整備から始まった。全部自分たちで設計、整備し、運営している。この運営費と捻出するために、栄グルメランドというイベントが始まった。

グルメランドの最初の目的はコミュニティーハウスの運営費であったが、その趣旨であると、来訪者へ気持ちがいっぱい伝わらないため、子供から老人まで一緒になって、心を込めたイベントを行い、これで100人集まったこともある。しかし、平成7年に0-157と各農家の規模拡大による忙しさのために終わった。

人に優しい、自然に優しいアイスクリームづくり・販売を行っている。原材料はみんな単品でも食べられ、低温殺菌のため高い栄養素がある。新商品の開発として風味にゲットウと言う沖縄の植物を使ったものもある。

カウベル自然浄化法は、尿処理プラントから液肥をつくるもの。沖縄から始まった技術であるため北海道に適しているか、と実験し、今年の6月からプラント作りを始めた。液肥を草地に還元し化学肥料を使わない草作り、それを牛に食べさせ、その牛乳をアイスクリームづくりに使いたいと考えている。また、液肥の副産物として野菜を作りも検討中である。

開催地より 久著路地区

「複合施設を中心とした地域づくり」

報告者：菅原俊一（久著路中央小中学校）

久著路地区の小中学校は鶴居村と標茶町と2つの行政地区から通っている。昭和63年に現在の農村改善センターが作られ、それを契機に地域整備が行われた。結成までに4つの地区が併合されている。それに伴い各神社が中央に集められ、年に一度のお祭りとなっている。

5つの学校が統合されたところなので、非常に広い範囲からの生徒が通っており、現在スクールバスが2台で通学している。平成に入り、校舎の新築をする事になった。

どういふ学校にするかということでPTAが他校を視察した。保育所も当時老朽化しており、保育所、小、中学校が一緒になり、更に農村改善センターと一緒に。平成9年度に完成。

小学校と中学校の間には189平方メートルの多目的

スペースがあり、給食を食べたり、パソコンを置いたり、隣の音楽室との壁を外しますと小ホールになる。各教室は廊下から教室内を見ることができ、広々とした空間設計となっている。

改善センター、保育所、小中学校一つにつながっている施設は、どのように使おうかということがまだ具体的に見えていない。

講 評

長谷山俊郎氏(農水省農業研究センター)

「活性」とは、化学用語です。これはモノの世界の話であり、ヒトの世界の話ではありません。だから、「活性」というのは妥当ではなく、活力の向上とか、活発化といった方が良いと思います。問題にするのは、ヒトの世界だからです。

活性化の対象は今までは経済一辺倒でした。けれどもそれだけでは行き詰まり、文化や環境を組み込んだ対象が重要になっています。

これは、戦後、日本が米軍に占領されて、地域が解体させられてしまった時、部落と地域が取られてしまった時から、「住民参加」が失われていったのではないのでしょうか。

人間を生き生きさせるための要因を考えてみましょう。

ひとつは役割を持たせること。

もうひとつは効力感。これは何かということ、自分たちがやったことが外部に注目されているという実感です。

意識を変えると、課題を投げかけ、それを実施しながら、新たな課題を投げかける。これは山形県小国町で私が学んだことです。住民の25%が変われば、地域全体が動いてきます。

今日のテーマを考えながらキーワードをあげてみたいと思います。

・組織：

皆さんが問題にしている地域の組織。これには従来の組織と新しくやっつけられる組織が必要ではないでしょうか。

諸塚の産業を基盤としたかつての公会堂という組織は地区が主になった組織です。これは従来の組織を新しい組織の本能を備えています。内部から変革を図る

能力を持っているとみることができます。標茶は新しい組織につくりかえつつあります。

・交流：

交流の意義は相互刺激にあります。それによって人は成長する。これは立場を同じくしてやるのが有効です。そこには新しい発見があるし、外部との交流があって変わっていきます。

・文化：

これは先ほどの小国町長のお話しにもありました。文化はその土地固有の生き方をパターン化したもので、食、住、言葉、あるいはいろいろな仕組みにもあります。これは100年単位の歴史の中で、出来上がったてくるものが多い。

しがらみも含めて生き方のパターン化されたものが文化です。しかし日本は戦後、文化ではなく、文明だけを大切にしてきた。

・再構築：

都市と農村で壊れたものの再構築には、農村からの再構築を図ることが重要と考えます。それが我々の使命だと思っています。

・感性を大事にした地域づくり：

男性と女性には生物的な違いがあり、女性の方には包み込むような特有の感性があると思います。ここを大事にし、取り組みが重要と思います。

・リーダーの任務：

リーダーの最大の任務は次のリーダーを育てることです。また、枠にはめられない自由な発想を持っているリーダーを育てることです。

しかもリーダーは各構成員がなんとなく思っていることを引き出して、全体のものをしていくこと、それを組み立てていくことも大事な任務です。

瀬田信哉氏（自然公園美化管理財団）

標茶の人たちとフランスに視察にいったことがあります。そこで皆さんが一生懸命学んでいる姿を見てここ標茶にも関わっていきたい、と思いました。

（スライド上映）

・フランスにて

200年前の木を使っている山小屋

牧舎を改造した民宿

農家民宿の様子

・千葉県四街道の里地

大都市近郊の里地は産業廃棄物やダイオキシンの問題を抱えています。

・秋山郷

7つの集落にあるゴミのステーションには、植物の木彫りが飾られています。ゴミは誰もが捨て、誰もが嫌がる、そしてお金がかかること。しかしゴミとの決別、別離と言う意識があると、その時の鎮魂歌として木彫りに意味があるのではないかと考えています。

これがゴミステーションになっているのかなと思います。

・与那国島

「お願い」の標識の中に「チリは持ち帰りましょう」と書いてありました。何故「ゴミ」ではなく「チリ」なのだろうか。ゴミという言葉は実は日本にはなかったのではないか。チリとは元々小さな物を指します。どんな小さいものでも、ここに物を置かないで下さい、という意味を含めているのではないかと考えています。

・バリ島

バナナの皮で作られたごみ箱。これらは中のごみもごみ箱も朽ち果ててしまえば全て土に戻ります。そんな時代にはこれはゴミではなかったのかもしれない。しかし、これが土に戻らないゴミになった時に、自分たちがどのように対応していくかを考えなければいけなかったのではないのでしょうか。

・フランス

キリスト教の国でも里地のようなところには道端に日本のおじぞうさんのような道祖神的なものがあります。そこに神がいて村や土地を守ってくれる。大地や自然に感謝すると言うことが大切なのだと思います。

活性化はある意味ではこの道祖神のように土地や地域の拠り所になるところから始まるのではないかと、思いました。

シンポジウム報告

新田園生活のすすめ

～21世紀のライフスタイルを語ろう～

日時：平成11年2月13日
 場所：東京国際フォーラム

そして、工業を興し、規格・大量生産を進め、輸出を増大させ、その利益で必要なものを買うというプロセス

基調講演

内藤正明氏

(京都大学工学部環境地域工学研究科教授)

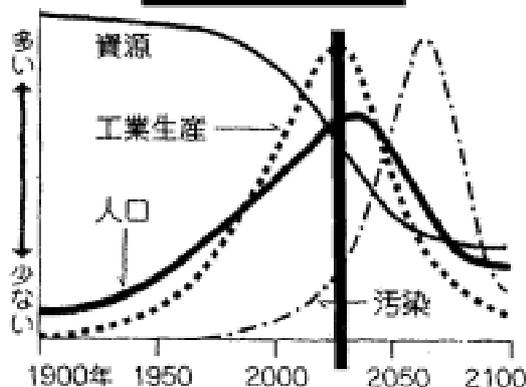
今日は、環境を専門とする立場から、今、何故、田園暮らしが必要とされているのか、特に日本において田園暮らしをすることの意味について話しをしたいと思う。

これからの環境がどうなるのかという点について、将来予測を紹介したい(図1)二千数十年の頃に、人口、工業生産が激減し、世界的規模で破局的な事態が起こると予測されている。1996年の予測だが、最近でも、こうした状況が良くなっていることを示すものはない。こうした事態を避けるためには、「持続可能性」をどのように達成すべきかという点が重要である。

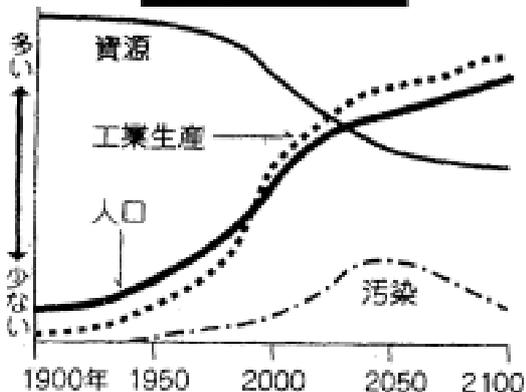
「持続可能性」について考えるために、温暖化の例を取り上げてみたい。一昨年の温暖化防止京都会議(COP3)では、様々な議論がなされた。専門家グループの指摘によれば、本当に地球温暖化を防ごうとするなら、今すぐ、CO₂排出量を60%削減する必要があるというのが大勢である。ヨーロッパは15%程度の削減目標を掲げているが、これは、経済・社会を根本的に変えていこうという覚悟があるようだ。一方、日本やアメリカが抵抗したのは、現在の経済・社会体制を維持することを前提としているからだ。

そこで、戦後50年を経て、日本が今どういう状況にあるのかということを見てみたい。日本は、敗戦後、わずかに残った、人、物資、資金を東京に集中させた。

破局シナリオ



持続シナリオ



国立環境研究所による予測シナリオ。無策だと、世界は21世紀半ばに破局を迎える(上)。早めに環境対策に力を移すと、安定した世界が望める(下)

朝日新聞96年1月8日、社説より

スをとった。都市づくりでも、東京一極集中を促進し、全国総合開発計画を推進することで現在のような国土



ができ上がった。こうしたやり方は、経済的物的な豊かさ、便利さを達成する上では非常に有効であった。しかし、その反面、「副作用」も大きかった。「副作用」としては、都市の過密・農村の過疎、水の汚染や大気汚染、そして地球へのCO₂、フロンといった環境負荷の増大、経済的格差の増大等が挙げられる。

今日の日本は、社会全体が経済的に豊かになるという目標を達成してしまい、目標を喪失してしまっている。その一方で、山のようにでてきた「副作用」は、産業構造、経済社会の仕組み自体から生じる問題だったのだ。

では、これからどうしたらよいのか。今日、いろいろな議論がなされているが、整理してみると、大きく2つの方向に分類できるのではないかと。

ひとつは、「技術中心主義」と呼べるもの。これは、日本の工業技術をより磨き上げ、また、原発の依存度を高めていくといった対応をとるもの。もうひとつは、脱大量消費、脱石油社会、循環型社会を目指すもの。農業と工業のバランスを取り戻し、農系回帰を目指す。全てがお金で買えるという市場原理、経済社会構造も見直すことになる。

この2派のうち、どちらが日本を救い、地球を救うのかはまだ分からない。興味深いのは、前者が、主に通産省を中心とした「国」レベルで主張されているのに対し、後者は、地方の小さな「市町村」レベルで様々な取組が始められている点。私は両方が併存してもよいのではないかと考えている。「国」レベルになると様々な利害関係があるため、車社会をやめる、工業をやめて農業に転換するといった大胆な方向転換は難しい。市町村であれば、「うちの村でやってみたい」という町長さんや有力者がいれば、どんどん実行でき

る。最近では、村おこしをかねて、「うちの村は木炭発電でやってみよう」、「水車エネルギーで織物をやりたい」といったユニークな発案があり、相談にのることも多い。

技術を専門としている立場から言うと、「技術」に多大な期待をかけない方がよいと思う。工業技術というのは、必ず「ツケ」をどこかに回さざるを得ない。例えば、リサイクル技術は、一見、資源を有効利用しているように見えるが、実はその機械を動かすために多くのエネルギーと資源が使われている。身の回りのゴミは減ったかもしれないが、その何倍もの負荷を地球環境にかける可能性があるのだ。これは、自然界の三大法則の一つである「エントロピー増大」の法則によるもの。例えて言うならば、人間が何か行動をすれば必ずどこかにツケが生じ、そのツケを返そうと何かすればさらに大きな利子がついて、サラ金のような状態になり、決して元には戻らないということ。

このため、私は、工業技術に対して否定的な見方をとっているが、小さなスケールの技術であれば、これらの問題を避けることができる。しかし、現在の経済社会状況下では、大量生産、大量廃棄型の技術しか儲からない。仲間の技術者でも、このジレンマに悩んでいる者もいる。社会が変わらない限り、真つ当な技術は出てこない。技術が社会を変えるのではなく、社会が技術を変える。現在の経済社会構造では、それに合った、環境にツケを回す技術しか生まれてこないのは当然である。

結局、戦後50年、我々は、農業社会から人や資源を吸い上げて、工業社会に投入してきたことも見直す時に来ている。これは、環境問題、過疎・過密問題、食料自給率の低下等の問題の大きな原因の一つ。

大量の資源を外国から輸入し、消費して、環境へ大量の負荷を放出するという日本社会の構造も問題。そこで、「循環」という考えが出てくるが、実はこれが難しい。外国から大量の資源を輸入し続けながら、国内で「循環」させれば確実にパンクする。自然界の三大法則のひとつ「物質保存則」はそれを示唆している。ご馳走をたくさん食べて、トイレに行くのを我慢するようなものだ。実際、生ゴミを堆肥にしたら大量に余ってしまった、古紙回収をしてみたが倉庫に山積みという事態が生じている。お遊び程度に小規模な「循環」をやっている程度であればよいが、国際貿易の構造を

変えることなく、日本全体で「循環」を追求すればパンクする。資源の投入＝輸入をストップするか、資源の輸入量と同じ量の排出物を外国に返還するかしかない。しかし、アメリカから輸入した食料と、同じ量の尿尿をアメリカに輸送することは可能だろうか？

では、これからどうしたらよいのか、ということを経済を総括したい。ひとつの試みとして、環境事業団では、工業団地からゴミ、汚水等を出さずに、地域内（周辺の農業地帯、住宅地含む）で循環利用するゼロエミッションプログラムを提案した。このように、コンパクトな地域ユニットの中で、モノを循環させていくという仕組みがカギになるのではないかと。言い換えれば、「地域自立」。自給自足とまではいかないが、できるだけ地域内でエネルギーや、資源や、人が完結した形で廻っていく仕組みが求められるのではないかと。これは、平成10年版の環境白書でも主張されている。こうした考え方は、まさに「新田園生活」にも通じるものだと思う。田園暮らしは楽しいから「したい」...で十分だが、今の社会状況の中では人類生存のために「すべき」時代に来ているのではないかと。

基調講演

～明日を素敵に生きるために～

浜美枝氏（農政ジャーナリスト、女優）

自分の人生を振り返ってみると、25歳で結婚し、30歳で子供が産まれた。子供をどういう環境の中で育てようかと考えたとき、都会の受験戦争の中で育てる自信がなかった。私は、子供の頃多摩川のほとりで、めいっぱい泳いで遊んで育った。そこで、自然が豊かで、東京からも通えるところで育てたいということで、箱根で暮らしはじめ、23年が過ぎた。4人の子供たちが、幼稚園、小中学校時代に自然の中でいろいろなことを体験できて幸せだったと思う。

さて、今、日本という国に胸を張って誇りを持っているという方はどのくらいだろうか。

日本は物質的に豊かになった。しかし、食料自給率はカロリーベースでわずか42%、輸入野菜は66%、ウルグアイラウンド合意後は米も輸入、味噌・醤油の原料である大豆の98%はアメリカから輸入している。遣伝子組み替えの大豆もあり、安全性の問題もある。大

切な食料をこれだけ輸入に頼っているというのは、先進国の中でも異常な事態であるのに、実感が伴わないということが問題だ。

日本は、情報も豊富で、平和で、自由な国なのに、何故、私たちは今の暮らしを心から幸せだと思えないのだろうか。私たちは、子供や孫たちの世代に、何を誇りを持って受け継いでいくことができるのだろうか。私はずっとこのことを考えてきた。

それは、戦後50年の歩みの中で捨て去ってきたものの中にあるのではないかと。というのが私の見つけた答え。モノとお金では幸せになれない。かつて、暮らしの中にあつた「文化」、自然の理にかなった「習慣」、四季の変化に彩られた「美しい景観」。こうしたとても尊いものを私たちは軽んじてきたのではないかと。四季の自然も含めた「美しい日本の暮らし」、こそ、次の世代に伝えていくべきもの。

田舎暮らしをしたいという人々は、もう一度こうした「美しい日本の暮らし」を取り戻したいと思っているのではないかと。各地には、素敵に、見事に、「美しい日本の暮らし」を実践している人々がいる。これからの私たちの幸せは、物質的に豊かになることではなく、「美」を日々の生活の中に見つけていくことにあるのだと思う。一人では難しいが、人のネットワークをつくり、みんなでやっていけばできるのではないかと。

どうして、女優だった私が、農や、食、環境といった問題に関心があるのかとよく聞かれる。中学生の頃から本が好きで、宮沢賢治、民俗学者の宮本常一、柳田邦夫などを良く読んだ。柳宗悦の本の中に、「ものをつくる人に美しいものをつくらせ、ものを使う人に美しいものを選ばせ、この世を美の国、浄土の国にしよう」という一節があり、子供心に強く惹かれた。宗悦は、全国各地の無名の人をつかった手仕事を世に広めた人で、民芸運動の推進者。私は、宗悦を師と仰ぎ、その足跡をたどって、これまで1200ぐらいの市町村を訪ねた。そこから、「農」や、「食」や「環境」の問題に関心が結びついていった。

この40年間に、日本の農村も大きく変わった。昭和30年代、新幹線や高速道路ができ、便利になって良かったと思う反面、基盤整備の名の下にあぜ道がコンクリートで固められていった。多くのお年寄りから、「このままでは日本が壊れていく、壊されていってしまう」という言葉を聞いた。茅葺きの家屋が壊され、本当に

切ない思いがした。

イギリスには、カンントリージェントルマンという言葉があるように、田舎暮らしは皆の憧れ。農家民泊をしながら旅を楽しみ、古き良きものを大事にする。何故、日本人は、歴史も文化もあるのに、このような美しい暮らしを壊してってしまうのだろうか。私の場合は、解体される民家を見て、この木を捨てるわけにはいかない、というせっぱ詰まった思いで、福井県他の家を譲ってもらった。

ヨーロッパでは、30年前から農地を手放さないために何をしたらよいかを考え、グリーンツーリズム、農家民泊をやってきた。オーストリア、ドイツをはじめ、イギリス、フランスでも同じ。やっと日本でも農村休暇法ができ、遅蒔きながらスタートしたところ。

私は、戦後の食糧難の話を母から聞いて育ったので、現在の日本の農、食を巡る状況が健全とは思えない。アメリカからどんどん食料を輸入しているが、どれだけの残飯をだしているだろうか。もし残飯を出さなかったら、食料を輸入しなくても足りるのではないか。これからは「適地適作」が重要だと思う。遺伝子組み替え作物の安全性の問題もある。将来の世代にどのような影響が及ぶかわからないのだ。

こうしたこともあって、私も「農業」や「有機」について勉強し始めた。専業農家の方から野菜作りを教わり、福井県若狭で、4年程前から手植え、手刈りで米作りも始めた。正直言って、村に入るといのは大変。噂もあつという間に広がる。10年間暮らす中で、少し結の気持ちも分かるようになってきた。そこで、農家レストランをオープンさせた。開店後、3年経ち、現在は地域の人が運営し、利益もすべて還元されている。

米作りには大きな喜びがある。手植えをする時には、「地球の中の一員として生かされている」ことを実感する。自分で作った野菜や米を食べられるという喜びはどんなものにも勝る。まさに生きている証、生きる喜びだと思う。

田舎暮らしを始めることが難しければ、グリーンツーリズムや農家民泊という方法も一つだと思う。グリーンツーリズムは、自然の景観や暮らしの習慣など農村にもともとあったものを都会の人に楽しんでもらうもの。若狭に農家レストランを作ったのも、集落にグリーンツーリズムの拠点を作りたかったから。若狭で

も農家民泊を始める家が何件か出てきた。

こうして、人生の第3楽章ともいえる、農政ジャーナリストとしての歩みが始まった。

「農業」は、自然、環境、食、伝統、歴史、美、暮らし、それから政治、経済、教育などいろいろな面から考えさせられる大きなテーマ。いろいろな地域を巡って、多くの女性や若者たちと明日の農業について語り合っている。女性は、地域に根付いて活き活きと活躍している。田舎暮らしを始めるに当たっても、夫婦の場合は、妻が心から田舎暮らしをしたいと思っているのでなければ難しいだろう。

これからは、自分らしい生き方は何かを考えていきたい。テーマを持った人生でありたい。皆さん一人一人では違う。若い時期にできなかったこと、あきらめていたこと、自分が自分のために、そして人のために何ができるかということを考えていく方が前向きで魅力的。素敵に年を重ね、素敵に年を取り去っていききたい。

橋のない川の作者である住井セイさんの「21世紀は食料の自給できない国からつぶれていくでしょう」という言葉は非常に重い。食料が自給できないような精神構造になったら、日本人は日本の歴史や文化すべてを捨て去ることになる。

宮本常一氏の言葉、「足下に文化あり。文化は足下から生まれる」。難しいことはない、自分の身近なところから文化は生まれるということ。

最後に、せっかくの人生、ご自分のステージはご自分でつくっていただきたいと思う。

パネルディスカッション

パネリスト

- 合田寅彦氏（茨城県八郷町の実践者）
- 竹越秀和・愛子ご夫妻（茨城県八郷町の実践者）
- 佐藤信弘氏（「田舎暮らしの本」編集長）
- 浜美枝氏（農政ジャーナリスト、女優）
- 大山充氏（国際航業株式会社）
- 司会 竹田純一（里地ネットワーク事務局長）

（司会）みなさん今日は、里地ネットワークの事務局長の竹田純一です。「里地ネットワーク」は、市民

や行政や企業や研究者、みんなが協力して、元気で潤いのある自然と共生した里地を創っていきこうというネットワークです。

今日の「新田園生活のすすめ」というシンポジウムには、21世紀の環境問題の解決のために、一人一人がエネルギーを浪費型の都市生活を止めて自給型・農的な生活をはじめ、食べものや環境への負荷を軽減すること、過疎化・高齢化の進む里地に新しい活力を注ぎ込むこと、自然と共生した生活の中で、豊かな潤いのある暮らしを取りもどすということなど多くの期待がある。

しかし、土地を販売するだけの田園開発は、地域の固有の文化を壊し、そこに移り住んだ人の暮らしも乾いたものにしてしまう。外部参入者が田園生活を始めるには、どうしたらいいのか、この点を話あっていきたい。まず、パネラーのみなさんに、田園生活への思いや素晴らしさ、田園生活を始められるきっかけになった部分から、お話しいただきたい。

(大山) 国際航業株式会社の大山です。私は、昭和21年生まれで、団塊の世代の直前。

日本の高度成長経済を支えてきた世代。しかし、バブル崩壊のころから、自分のことなどを考える時間が増え、田園生活に関心が出てきた。埼玉に住んでいるので、越生によく行くが、なんとも懐かしい感じがする。なぜかと考えると、里山、田園、小川の風景というのは、小さい頃原風景。セカンドライフはこういうところで過ごしたい。これまでのつきあいもあるので、東京からも2、3時間で行け、農作業ができるようなところが理想。同世代でも同じ様な人が多いことが分かった。しかし、普通の人々が突然田舎で暮らし始めるのは大変なので、それを助けられないかということで、サポート事業を考えている。

(合田) 茨城県八郷町で農業をやっている。八郷に住み始めて16年。その10年ぐらい前から、つきあいがある。1973年、300人ぐらいの消費者が集まって、八郷町に自給農場を作り、自ら野菜を作ったり、農家に無農薬で野菜を作ってもらってそれを買い取るという様な活動をしてきた。東京からは2時間半。生産と生活が密着したライフスタイルを子供に体験させたのはよかった。どこで会社を辞めてこうした生活を始める

が見極めるのが難しいところ。私は45才で始めたが、60才になったらエネルギーも落ちる。

ただし、会社を辞めなくとも、年間の休日は、141日、1年の38%もあるので、会社に通いながらも週末の田園生活は始められる。農地は余っており、是非みんなに来て欲しい。そしてできるだけつつましい生活をしよう。今の農村には活力がないので、経験や技術を村のために役立て、村の文化を高めて欲しい。

(竹越秀和) 茨城県八郷町で、夫婦で家具を創っている。東京生まれの東京育ちなので自然の中でモノをつくってみたいという憧れがあった。最初は八郷町の隣町に住んでみたが、調整区域で家が建てられなかったので、八郷町に引っ越した。山の南の麓で、暖かく良い場所だったので、地主さんに何度も通ってお願いした。井戸、電気工事以外は、基礎工事から全て二人でやった。作業していると近所のお年寄りが寄ってきて、アドバイスをもらったり、苗木をもらったりした。ゆっくりとはあるが、地域の様子も分かってきて、集まりにも入れてもらい、ここに根を生やして生活していくことができるようになってきた。ゆっくりと時間をかけて入っていったことが結果的によかった。

(竹越愛子) 八郷町に来たときは、若くて世間知らず、怖いモノ知らずだったと思う。今は、空気や水や土を汚さないよう気をつけながら、食べ物も家具も、作れるモノは何でも作っている。年に、1、2回つくば市で家具の展示会を行い、注文を受けて家具を作っている。木の年輪は、1年にひとつしかできないので、無駄にしないように大切に作っている。民家の解体材を材料にすることもある。手間がかかるが、値段に換算すると安く売らざるを得ない。18年間経済的にゆとりがあったことはないが、いい家具を作りたいと言う気持ちにウソをつくこともなくやってこれたことは幸せ。自給自足なので生活費も抑えられる。

(佐藤) 宝島社で、「田舎暮らしの本」を編集している。創刊から11年たつが、田舎暮らしに関心のある人は増えている。大きく2グループがあり、ひとつは若い人たち(20~30代)が子供を育てる環境や家族の健康を求めて田舎暮らしを始めるもの、もうひとつは定年後に田舎暮らしをはじめもので、これが今後は

ますます増えていく。最近では女性がグループホームを作って田舎暮らしを始める例もある。読者が求める情報としては、まず物件情報で、北海道、信州等は問い合わせも多く情報も多い。借家がないかという問い合わせも多いが、実際あまり借家はない。事例研究も重要で、旦那が主導型の場合に奥さんがいやがって失敗するといった例もあるので、さまざまな例からヒントを得てほしい。田舎暮らしを楽しむために、石臼の使い方といった実践ノウハウも知っていると生活が豊かになる。スタート時期は人様々だが、いつまでも待っているとなかなか実行できない。まずは、短期間でも試しに住んでみてはどうか。

(司会) 後半は、どのような点に注意したら田園生活がはじめられるのか、これから田園生活を始めようという方に、課題を中心にお話いただきたい。

(竹越愛子) 都会では何でも行政がやってくれるが、道路の舗装や消防団など、田舎では住民が自分たちでやっている。住民が目に見えない形で支え合っている社会。このためこうしたことに協力せず、山菜採りだけ楽しんでいると周りの人から冷ややかに見られる。

(竹越秀和) エコロジカルに暮らすには技術が必要です。うちは、雑草が生えていても気にならず、除草剤も使いたくないと思っているが、周りの農家はきれいにしている。先日、篠竹の地下茎が、うちから、となりの畑に侵入して困るので、薬をまいて欲しいと言われた。こちらがエコロジカルな暮らしをしたいと思っても、周りの人に迷惑になってしまう場合もあり難しい。

(合田) 村に入って失敗するのではないかと心配しているかもしれないが、あまり完全主義でいかない方がよい。私も先日、部落の結婚式をすっぽかして、どうしようかと思った。村社会は、みんながお互いのことをよく知っている。失敗が人の噂になっても、気にしないことだ。だんだん土地に馴染みながら、心を開いていけばよいのではないかと。

それから、土地を売ってくれというのは禁句。村の人は土地を先祖代々の大切なものと思っている。自分はこの場所がとても気に入っているのだから、どうしても

住みたいんだと言うべき。土地を探す助走段階から村とのつきあいは始まっている。まず、村に入る前に、その農家のお米を1年間食べさせてもらうことから始めてはどうか。

(大山) 国際航業では、新しく田舎暮らしを始めたいという人をサポートする事業を始めようとしている。田園生活をスタートさせるためには、「住む」、「健康」、「生きがい」という3つの課題を整理しておく必要がある。首都圏に住んでいる人3000人にアンケートを行ったところ(回答800名)、田舎暮らしを始めたいと答えた男性は68%、女性は49%。積極的な男性と、現在の暮らしが気に入っている女性の差が出た。夫婦間で、この差をどう縮めていくかが重要。国際航業では、「地球とずっとクラブ」という会員組織をつくり、田園生活のための入門講座、フィナンシャルプランづくり等のお手伝いをしたいと思っている。

(佐藤) 都会の人が田舎に入ったときにトラブルにならないためには、都会暮らしと田舎暮らしは全然別のものだということ認識しておく必要がある。いきなり田舎に入らないで、いろいろなことを勉強し、ステップアップして行って欲しい。こういうセミナーや農家民泊、農業研修などを体験してはどうか。週末田舎暮らしもよいのではないかと。これなら大丈夫かなと思ったら、移住すればよい。

(司会) 大山さんの提案、佐藤さんの提案は、田園生活を始める、ひとつのきっかけになる。他にも、さまざまな方法があると思うが、まず、何事も行動してみないと分かりませんから、やってみて考える方がよいのでは。最後に一言づつ、パネラーの方をお願いしたい。

(竹越愛子) 住み始めると方言の問題がある。八郷町では、おじいさん、おばあさんのことも、おじさん、おばさんと呼ぶ。また、「明日、あさって、やのさって」となる。言葉のサポートもいるかも知れない。

(竹越秀和) 木工など、ものづくりで暮らしていくのはとても大変。経済的な価値観を180度代える必要がある。

(合田) 八郷町に住み始めた頃、長男は中学3年だったが、今では、自分で農業をやっている。これから田舎暮らしを始めたい人にひとつ提案がある。田舎での履き物は「地下足袋」。地下足袋を素足にはいて、土の上を歩いてみると、大地の感触が直に伝わる。それを心地よいと思えたら、田舎暮らしは合格だろう。

(浜) 私も、東京で3日アスファルトの上を歩いていると、土を踏みたくなる。田舎暮らしを始める方は、無理せず、少しずつはじめて欲しい。価値観はひとりひとり違うのだから、何が自分のアイデンティティなのかよく確かめて欲しい。

日本には、鎮守の森がある。こうした心のよりどころを大切にしたい。田舎に暮らしていると、土、水、空気、人の心の温かさなどにつつまれて生きてい

るのだということを実感する。

私が田舎暮らしを始めた30年前には、全然情報がなかった。今はいろいろな情報もある。まず、自分でできるか、チャレンジしてみることが大切。

(司会) これから田園生活を始める人は、無理をしないで、少しずつ挑戦してみたい。私たち自身の手で、浪費型の生活を農的・自給的な生活に変えて、環境を守っていこう。高齢化、過疎化で悩む里地からのラブコールにどう応えていったらよいだろうか。ただ田舎に住んで自分だけが満足するのではなく、地域のコミュニティを一緒につくっていくことが大切なのではないか。農村の中で、「循環」「共生」「参加」型の社会を作れたら素晴らしい。子供達に残せるような、そういう社会をつくっていききたいと思う。

イベント・募集案内

環境NPO「聚」主催のイベント

・里山ワーキング

地主の方からお借りした東京都町田市にある里山で年間を通した活動を行います。昔ながらの雑木林として蘇らせるため、地元で行われていた土地利用の在り方や手法を取り入れた活動を行います。

日時：3月14日（日）アズマネザサ刈りと樹木調査・
3月28日（日）植生調査

場所：東京都町田市三輪周辺

参加費：500円

・グリーンセイバー・ベーシックセミナー

身近な植物や自然について、より正しい知識と理解を深め自然生態系の保護。育成に寄与できる人をより多く育てるためにグリーンセイバー検定を行っています。この検定に向けてのセミナーです。

日時：3月29日（月）～30日（火）
4月24日（土）～25日（日）

場所：中央大学駿河台記念館

日時：5月8日（土）～9日（日）

場所：大阪YMCA

参加費：テキスト3,000円・料金17,000円（会員・学生15,000円）

・グリーンセイバー・アドバンスセミナー

今年からスタートするグリーンセイバーアドバンス検定。この検定に向けてのセミナーです。

日時：4月10日（土）～11日（日）

場所：江戸東京博物館

日時：5月15日（土）～16日（日）

場所：国立青少年オリンピックセンター

参加費：テキスト3,000円・料金17,000円（会員・学生15,000円）

問い合わせ（すべて）：環境NPO「聚」

tel 03-5485-6767 fax 03-5485-6654

木造校舎改修大作戦

地球デザインスクールの拠点であるセミナーハウス。訪れる人が居心地の良い部屋をつくるため、改修を行います。

開催期間：3月9日（火）～31日（水）

場所：京都府宮津市中波見分校跡地

参加費：無料

問い合わせ：地球デザインスクール事務局

（担当：簗・中嶋）

tel 075-417-3147 fax 075-431-8376

E-mail earth-d@ja2.so-net.ne.jp

ひろかわ森の祭り

弘川寺歴史の文化の森オープン記念としてハイキングや山仕事体験、工作等のイベントが行われます。

日時：4月18日（日）

場所：大阪府河南町 弘川寺歴史と文化の森

参加費：無料

問い合わせ：

河南町事業部産業課 tel 0721-93-2500

里山倶楽部事務局 tel 06-4704-0018

さとやまマジカル3MANMAツアー

身近な自然・里山で遊ぶことで「自然とのつながり」と「ありのままの自分への手がかり」を見つけようというツアーです。

日時：3月20日（土）～21日（日）

場所：大阪府河南町かぼちゃの家周辺

募集人数：15名（15歳以上）

参加費：3,200円（会員は3,000円。食費を含む）

問い合わせ：里山倶楽部（ひのきもと）

tel & fax 0721-29-5576